

もっと知りたい

武者小路実篤

び じゅつ へん れき

実篤の美術遍歴

武者小路実篤は、特に絵画や彫刻の学校に学んだこともなく、50歳を過ぎるまでは日本の外に出たこともありません。

しかし、実篤は、古今東西の優れた芸術を味わい、作者の魂に触れる喜びを終生大切にしました。そして、鋭い審美眼と芸術に対する愛情に満ちた彼の意見は、日本の多くの芸術家や社会に深い影響をもたらしたのです。

一 美と真実への情熱

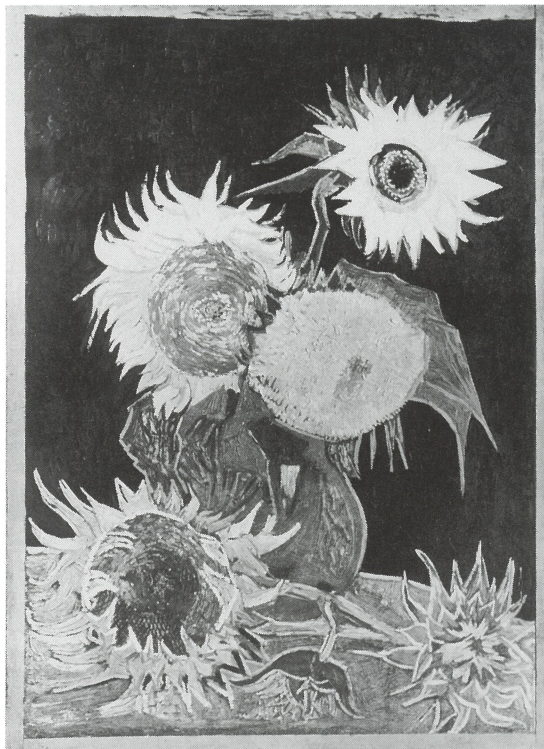
二十世紀の初め、日本ではまだ知られていなかったセザンヌやゴッホの作品の、人間的な強さ、美しさに、実篤は誰よりも早く気づきました。実篤は、世間的な先入観などに左右されずに自分の感性を信じてしっかりとものを見つめ、美と真実を捉えようと努めました。優れた洋画家岸田劉生、中川一政など、たくさんの人々がそういう実篤の強い感化のもとに大成して行きました。

二 作者との心の交流

実篤は、作者が有名であろうと無名であろうと、自分の心に響いて来る力を持った作品を大切にしました。千年も昔の作者の心が、作品を通して実篤の心にいきいきと蘇って来て、生きる元気を与えてくれるのです。実篤はそういう絵や陶器や彫刻などをいつも手許に置いて、古今東西の作者と心を通い合わせていました。

三 欧米旅行で得たもの

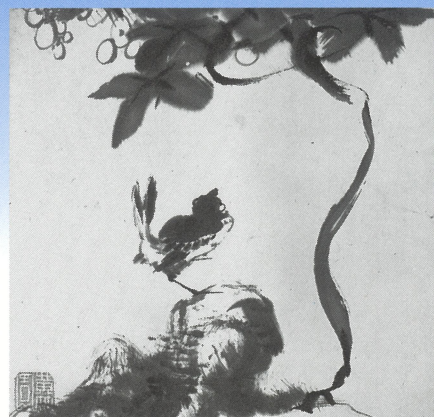
昭和十一年四月、五十代になった実篤は、八ヶ月近い欧米への旅に出ました。この旅の間に、数々の美術館や展覧会でみごとな作品を直接鑑賞し、マチス、ピカソ、ルオーといった芸術家たちとも出会いました。



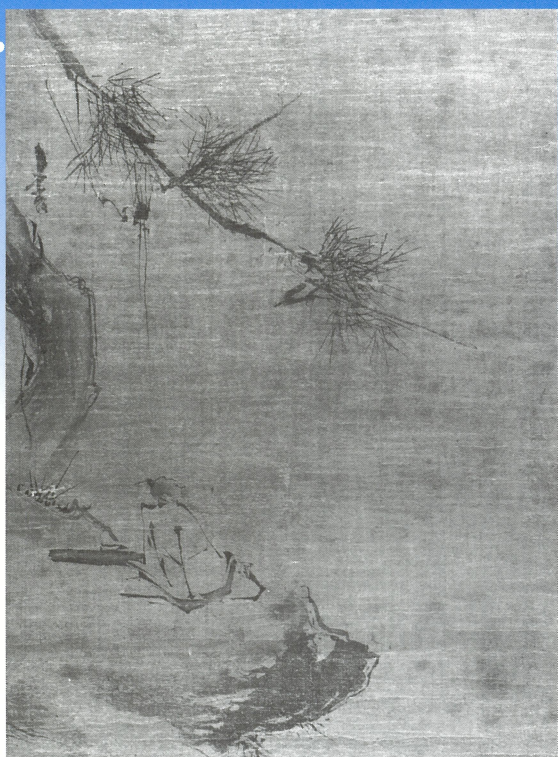
「白禪」の美術館を作ろうという実篤たちの願いから、大正9年に山本願弥太氏によって購入され日本に来たゴッホの「ひまわり」。惜しくも昭和20年、戦災で焼失した。



現・調布市若葉町の自宅で、愛蔵品に囲まれた実篤（昭和30年代）



「八大山人画冊」
 実篤が手元に置いて、作者と心の中で言葉を交わしていた愛蔵品。八大山人は清朝初期（17世紀ごろ）の中国の画家、自由奔放な画風で知られる。



伝梁楷「松下琴客図」
 実篤が最も愛した書画の一つ。梁楷は南宋（13世紀ごろ）の中国の画家。山水画にも人物画にもすぐれた作品を残した。

『僕の今度の旅行は、知識ではなかった。古今東西の殊に西洋のひとりひとりの人間の魂にふれる事が出来た事と思っている。エジプト、ギリシャから現代までの芸術的作品を通して僕は実にいろいろの人の本心にふれた。そして人間の本心にふれ得るものは又自分の本心である。僕は秀れた人間は皆本心で生きた人々だという事実をたしかめて歩いて来たようなものだ。』

（「一人の男」より）

四 古人の心に触れる喜び

「松下琴客」は松の下で琴をならしている。そこに風が吹いて来て松風の音がする。それに聞きほれて、一瞬琴をひくを忘れた心境をいみじくもかいたものの気がする。松も梁楷でないとかけないし、全体のあつかい方も勿論不思議に調子が高く、これ以上渾然とした画はかけないと思われる。（略）僕が特に感心したのは、着物の線だ。この線がひける境地は大したもので、本物を見ないと想像の出来ない、心と腕の冴えを見せている。実に無比の精神力が、この短かい線にこめられている。上には上があると言う言葉があるが、もうこうなるとこれ以上は想像の出来ない心のこもり方だ。

この小さい画にこめられた集注された力の無比さ、しかもその境

地に遊んでいる純粹さ、僕はそれをまのあたり見る事が出来る画のよさを十分味わえる事を実に喜んだ。』

（「私の美術遍歴」・「梁楷について」より）



「欧米旅行日記」
 昭和11年の欧米旅行中のスケッチや写真を挿入した旅日記（昭和16年 河出書房刊）



実篤愛蔵の「薬師如来坐像」
 作者は江戸時代の木喰僧・明満で、米麦を食べず草木を食べて諸国をめぐり仏像を刻んだ。